

を得る」という物語の追加は、人を大事にするセロイの信念と情の深さが運を引き寄せていることを印象付けるよう作用している。ギニアから韓国人の父を探しに来た青年キム・トニーと、彼の祖母であり「金貸し」業を営むキム・スンレはウェブトゥーンには登場しないキャラクターである。トニーの父親捜しをめぐる一連のエピソードは、物語に梨泰院の国籍・人種的多様性を印象付ける効果を持つとともに、「役立たず」な「外国人」（として、トニーは登場する）にも分け隔てなく接するセロイの懐の深さの表現として描かれ、結果的にセロイに莫大な利益をもたらすのである。

とはいえ、表1の8に見られるように、セロイが単なる人情派で運が強いだけのキャラクターではないことも付け加えられている。セロイは自分だけが利益を追求するのではなく、地域を活性化させることを通じて、周辺の商店とともに自らの利益を拡大する。このような物語が追加されることで、ドラマの翻案が単に人に情をかければ運が開ける、というような単純な道徳的メッセージに還元されてしまうことを回避している。しかしドラマにおける、よりインパクトの強い展開の必要性が、「運」を強調するような変更を強いているのではないかと思われる。

(2) 異性愛ロマンスの強調

次に、女性キャラクターが物語に果たす役割についてみておこう。表1の8と、表2の3では、セロイの経営パートナーであり、セロイに恋するキャラクターのチョ・イソが物語の中で果たす役割が幾分

変更されていることがわかる。ドラマへの翻案で、イソはより「怖いものなし」に描かれ、またその経営的能力の高さも、より積極的に他者から評価・承認されたものとして描かれる。

また、表1の10にあるように、カン・ミンジョン理事はウェブトゥーンから大幅に書き換えられており、セロイとともにチャン会長を打倒しようとする援助者として登場する。ウェブトゥーンでは自らの利益のみを追求し「あなたの母親でもないのになぜ助けなければならないのか」とセロイらを冷たく突き放すような姿が描かれるのは大きく異なる。また、キャラクターの外見もウェブトゥーンでは老齢の女性として描かれている。しかしドラマへの翻案にあたって、カン・ミンジョンは長家の創業者の意思を継ぐ者として会長の非理を暴き、権力を奪取しようとする有能な企業家であり、魅力的な外見を持つ女性へと変更された。

このように、ドラマ版では女性キャラクターは魅力的な外見と、卓越した経営的能力を「あわせ持つ」ものとしてより明確に設定され、主体的に人生を選び取っているように描かれる。と同時に、彼女らにサポートされるにたる主人公セロイのカリスマ性も、一層高まるのである。

しかしドラマ版の女性キャラクター達は、最終的に「恋愛」を手に入れることで「完成」されるようにも描かれた。表1の3にあるように、トランスジェンダーとして描かれるキャラクター、マ・ヒョニは、ドラマ版では性転換したことが明示されるとともに、ウェブトゥーン版にはなかったグンスとの恋が暗示される。